

時を感じる

矢鳴 虎夫*

「光を見るためには目があり、音を聞くためには耳があるのと同じように、人間には時間を感じとるために心というものがある。そして、その心が時間を感じとらないようなときには、その時間はないも同じだ。」これは、有名なミハエル・エンデの小説「モモ」の一節です。時間ドロボーによって、町の人々はみんな無駄と思われる時間はすべて盗まれ、ゆったりとくつろぐことを忘れて毎日毎日機械のように働かざるを得なくなります。このため町全体がイライラ・トゲトゲしてきてまったく楽しくなくなります。ここに、人の話を聞くことだけが取柄の少女「モモ」が現われて、時間ドロボーから、時間という宝を奪い返し、再び楽しい町にしていく、というお話です。

さて、このお話は益々ハイテク情報化していく現代を痛烈に皮肉ったものですが、奇しくもこの3月の情報処理学会・全国大会の会長あいさつも「ゆとり」を主題にした話であったのは、やはり、私達はここにいて、人間社会としての真の情報化の意味を総合的考え、行動しなければならないと感じます。今回の学会において、認知科学やヒューマンインターフェースなど、人間を主題にした研究発表が一段と多くなったのは大変嬉しいことですが、はたして人間間の交流についてはどうでしょうか。情報機器が発達するのと同じように、それらをも利用した真の心の交流方法も研究と実践を積まなければ、「モモ」の落とし穴に陥らないとも限りません。

私達の大学は、21世紀の情報化時代におけるモデルキャンパスを目指しています。これを真に実現するためには、情報科学センターを中心にして、情報機器の提供のみに留まらず、真の人間のサービスと交流ができるような体制づくりが必要です。同時に利用者を含めた全学的支援もおおがなくてはなりません。

尚、私はこの4月より、情報工学部に移ることになりましたが、過去、情報処理教育センターと情報科学センターで14年余りを働かせて頂き、この間、代々のセンター長をはじめ、各センター職員そして利用者などのご支援によって、大過なくすごさせていただきましたことを、この紙面をかりて感謝とお礼を申し上げます。

* 情報工学部知能情報工学科、3月まで情報科学センター